2018.7.15
Vol. 56

北海道サケネットワーク Newsletter

発　行 阿部周一
事務局 木村義一 札幌サケ協議会
〒004-0022
札幌市厚別区厚別南 7 丁目 18-19
Tel/Fax：011-894-0081
e-Mail：giichiketa@yahoo.co.jp
URL：http://salmon-network.org/
編　集 寺島一男

サケネットワーク総会

サケ会議

2018 総会終わる

2018 年度北海道サケネットワークの総会及び北海道サケ会議・現地見学会が、5 月 26 日-27 日旭川市で開かれました。旭川市での開催は、2011 年に次いで二度目です。

総会の概要

総会は、26 日 13 時 30 分～14 時 10 分まで、旭川市神楽公民館講座室で開かれました。出席会員数は 18 名でした。

阿部周一代表の挨拶に続いて、木村義一事務局長を進行役に議事に入り、報告事項・協議事項について審議した後、情報交換が行われました。

報告事項では、2017 年度の活動として①前回総会・サケ会議の報告　②会報 10 号の発行（大幅なリニューアル）　③ニュースレター51～54 号の発行が報告されました。

協議事項では、①2016 年度の収支決算・会計監査報告　②2018 年度の活動計画案　③2018 年度の収支予算案　④積丹町サクラマス・サンクチュアリーセンターの新規加入（特別会員）　⑤規約の一部改正（事務局次長の新設）　⑥IYS（国際サーモン年）に対する取り組み提案がなされ、いずれも承認されました。

情報交換では、札幌市豊平川さけ科学館をはじめ、7 団体から活動の現況などが報告されました。

サケ会議の概要

引き続き 14 時 15 分～17 時 15 分まで同会場で、北海道サケ会議が開かれました。主管団体である大雪と石狩の自然を守る会・あさひかわサケの会の寺島一男代表の歓迎挨拶、阿部周一代表の挨拶、西川将人旭川市長のメッセージ(代読)に続いて、記念講演（14 時 30 分～16 時）とテーマートーク（16 時～17 時 15 分）が行われました。

記念講演では、札幌大学教授、前・旭川市博物館館長の瀬川拓郎さんが、「上川アイヌとサケ」と題して講演しました。

瀬川さんは、これまで伝統的に語られてきたアイヌ民族の生活と文化を、考古学の分野から再考、北方世界でダイナミックに活動する先住民族として脱皮させ、全国的に注目される先進的な研究者です。

その研究の土台となった上川アイヌと上川盆地のサケ漁について克明に話され、参加者に感銘を与えました。

テーマトークでは、「子どもたちにサケを！～なにをどう伝えるか」をテーマに、現場でサケ教育に関わる 5 名のスピーカーによって意見交換が行われました。

トークに先立ち、本会顧問で北海道大学名誉教授の浦野明央さんが話題提供を行い、それを受けて同顧問で北海道総合研究機構の河村博さんをコーディネーターに、札幌市豊平川さけ科学館館長の岡村康寿さん、とかち・帯広サケの会代表の千葉養子さん、大雪と石狩の自然を守る会サケゼミナール部長の橋詰郁朗さん、旭川いずみこども園教諭の山田さなえさん、日本釣振興会北海道地区支部道北支部長の山田直佳さんらが、実践に基づいた意見交換を行い、実りの多い報告だったとして注目を浴びました。

現地見学会

翌日の忠別川現地見学会(8 時 30 分～12 時 10 分）は、JR 旭川駅を起点にサケが遡上する忠別川下流部（クリスタル橋～神楽岡公園間の両岸約 3 キロ）を歩きました。

天気に恵まれ、途中、旭川市博物館を見学し、最後には産卵床を出たサケの稚魚を観察するなど有意義な見学会になりました。

Topix　国際サーモン年

INTERNATIONAL YEAR OF THE SALMON

［背景と概要］

北太平洋沿岸各国におけるサケマス類の総漁獲量は、2017 年に 92 万トンでした。サケマス類の資源状態には地域差がみられ、ロシアやアラスカなど北方域で全体的に高い水準ですが、日本など分布の南限に近い地域では不安定で、減少傾向を示す個体群が多くみられます。一方、北大西洋に分布するアトランティック・サーモンの養殖生産量は 200 万トンを超えていますが、野生資源の状態は深刻で、2015 年の漁獲量は 1,260 トンと 1970 年代の 10%程度に減少しています。

太平洋サケマス類やアトランティック・サーモン（以下あわせてサーモンと総称）と人類との関わりや将来を見据え、持続可能な資源管理に向けた研究や技術開発を推進するため、国際機関の北太平洋溯河性魚類委員会（NPAFC)と北大西洋サケ保全機構(NASCO)が中心となり、「国際サーモン年(International Year of the Salmon、以下 IYS と呼称)」プロジェクトが計画されています。IYS の基本コンセプトは、「変わりゆく世界におけるサーモンと人類（Salmon and People in a Changing World)」で、以下の 6 つのテーマが設定されています。

(1) Status of Salmon： サーモンと生息環境の現状を把握
(2) Salmon in a Changing Salmosphere:環境変動と人的要因がサーモンの分布と資源量に与える影響を理解し、将来を予測
(3) New Frontiers： サーモンの科学を推

進する新技術の開発

(4) Human Dimension：サーモンに関わるコミュニティや人々の結び付きとレジリアンス強化

(5) Information System：サーモンと生息環境に関する様々な情報を公開

(6) Salmon Outreach & Communication：生態、社会、文化、経済などサーモンの持つ多面的な価値を理解し、サーモンと生息環境の回復や保全を推進

［今後の予定］

2016～2018 年は IYS の準備・周知期間で、IYS Local Symposium（2018 年 3 月 26 日、日本水産学会春季大会シンポジウム「環境変動下におけるサケの持続可能な資源管理」、東京海洋大学）、NPAFC-IYS Workshop（2018 年 5 月 26-27 日、ロシア、ハバロフスク）などの行事が開催されました。2018 年 10 月には、各国で IYS のオープニングに向けた政府告示や行事が行われる予定です。そして、2019 年を国際サーモン年の中心に定め、北太平洋沖合域における国際共同調査などの研究活動や各種行事が計画中です。また、2020～2022 年は補足活動と取りまとめに当てられ、その間にワークショップやシンポジウムなどが開催されます。多くの方々がサーモンの現状と将来に関心を持ち、地域の IYS 活動が活発になるように、北海道サケネットワーク加盟団体の皆様のご協力をお願い致します。

浦和茂彦（北海道区水産研究所）

サケ News

淡水と海水を往復する魚たち

Google で「ナノバブルの魔法」を検索すると、下の不思議な写真に出会えます（図 1）。何が不思議か、わかりますか？　よく観ると、コイ（淡水の魚）とタイ（海水の魚）が一つの水槽に同居しています。これは水槽の水にナノバブル*1 を混ぜているからだそうですが、通常このようなことは起こりません。なぜなら、コイとタイはそれぞれ淡水と海水で生活する体の仕組みになっており、入れ替えると体の成分を正常に保てなくなるからです。しかし、ご存知のようにサケの仲間は川で生まれ、海で成長し、再び川に戻る一生を示します。何故このような離れ業を演じられるのか。その詳細は別の機会に譲り、今回は淡水と海水を往復する魚たちを紹介します。

淡水と海水を往復する魚は“通し回遊魚”と呼ばれ、日本に生息する淡水魚の約半数が含まれるといわれています。この割合は世界的にみても多いのですが、それは日本の川が短いため、生まれたての魚が海まで流される可能性が高いからであろう、という説があります。“通し回遊魚”は、サケの仲間を始め、ヤツメウナギ、ワカサギ、シロウオ、シシャモ、アユ等、川で生まれて海へ降りる仲間と、ウナギに代表されるように海で生まれて川へ昇る仲間に分けられます。このうち、海へ降りる魚は北方に多く、川へ昇る魚は南方に多い傾向があるようです。それは、北方ほど川より海に餌が多く、南方は逆に海より川の餌が豊富であることと関係があるようです。“通し回遊魚”には食用として重要な魚が含まれますが、残念ながらいずれも資源量は減っているのが現状であり、資源の早期回復が求められています。

図 1.コイとタイが同居する水槽（http://www.geocities.jp/synchronature/Science/NanoBable.html）

図 2. 第 6 回サイエンスカフェお魚北海道（http://chitose-aq.jp）

*1：REO 研究所の千葉先生と産総研の高橋先生が開発した直径 1 万分の 1 mm 以下の気泡

イベントの紹介

サケのふるさと千歳水族館において、「第 6 回サイエンスカフェお魚北海道」が開催されます（図 2）。お近くで興味のある方はご参加ください。

日時：2018 年 8 月 4 日（土）
18:00～20:00
場所：サケのふるさと千歳水族館
大水槽前
料金：無料
演題：サケ科魚類の釣りの科学
演者：坪井潤一（中央水産研究所内水面研究センター）

【お詫びと訂正】

NL55 号で宮城県における養殖ギンザケの生産量を「12 万トン」と誤記しました。正しくは「1.2 万トン」です。

（伴　真俊）

加盟団体紹介

あさひかわサケの会

1964 年(昭和 39 年)を最後に、上川盆地からサケが姿を消しましたが、20 年後の 1983 年に大雪と石狩の自然を守る会が回復運動を開始しました。

活動が実って 2000 年下流の深川頭首工に魚道が完成。2003 年旭川市内の石狩川で遡上を正式確認。2009 年国が大量放流試験を開始。2011 年サケが群れで戻るようになりました。

守る会では「石狩川を野生のサケのふるさとに」するため、より本格的な組織が必要として、2013 年あさひかわサケの会を設立しました。守る会と協働して、石狩川の環境保全、環境調査、サケのふ化放流と人工産卵床の造成、アイヌ文化との連携、市民行事の開催などを実施しています。会員数 120 名。